

## 日中活動で得た安心感や楽しさをその先の自信につなぐ

総合福祉センター 弘済学園  
療育支援課 係 長 瀬古真紀  
療育支援課 福祉指導員 味埜美穂

### はじめに

近年、発達の違いや偏り、気がかりのあるお子さんが増えていると言われ、サービスは増加し地域支援は充実している。一方で、それらのサービスを利用しない時間はご家庭での過ごしが中心となる。お子さんによっては、ご家族が追い付けないほど活発に動き、快不快をこれでもかと思うほど、発信してくれる。ご家族は成長をうれしく思う反面、少し疲れたな、どうしたらよいのだろうかという先の見通せない状況に困惑することが多々あるのだろうと感じる。

今報告は3歳で児童入所施設に入所となったAさんを事例にあげる。入所前は、一日中動き回り、毎日理由の分からない泣きや自傷が見られ、睡眠も不安定で、ご両親は苦慮されていた。そのAさんが日中活動の中で、職員との関わりやプログラムから、安心感や快刺激、楽しさを得て心身ともに成長した2年半を報告する。そして、この事例を通して、どのようにこどもの「出来た！」「やりたい！」を広げていくべきかを考える。

### I. 対象と方法

#### 1. 対象

##### 1) プロフィール

対象はAさん、6歳5か月の男児。出生時は在胎38週。重度の知的障害、自閉スペクトラム症、睡眠障害。2歳になる少し前に両親が発達の遅れを心配し、地域の療育施設に通園。週に1日1時間の児童発達支援の母子通園、週に2日4時間の児童発達支援を利用。これ以外は、母子で家の中での過ごし。現在までに発語は無し。多動で高所が好き。3歳7か月で当園に入園。

家族構成は父、母、本人の3人家族。父母ともに本人への愛情が深く、週末は毎週面会に来園され、年間5回ある1～2週間の帰省期間はすべて帰宅されている。

##### 2) 入園に至るまでの家庭での困り感

夜にまとまった睡眠がとれず、4時間眠り3時間起きを繰り返す。そのため、2021年10月頃からリスパダールとロゼレムを服用。(リスパダールは就床の分一、ロゼレムは夜間に目覚めた時に分一)

毎日原因がよく分からない泣きが20～30分続き、小康状態になった後に再び泣き始め、トータルで2時間ほど泣く。その間に壁に頭をぶつける自傷、足で壁を蹴る。こうした経緯から、両親のみでの対応が難しくなり、当園への入園につながる。

## 2. 方法

入園から現在に至る、Aさんの日々の支援記録や実践を整理し、本人の成長過程とともに、得られた支援のポイントをまとめた。

## II. 支援環境

### 1. 所属日課クラス(基礎1クラス)の概要

#### 1) クラスの構成メンバー

4歳から8歳までの男子利用者8名、女子利用者1名で構成。その内、未就学児7名、学齢児2名。当園では最年少の日課クラスであり、在園年数は約2か月から3年未満。知的障害は軽度から最重度で、ほとんどのメンバーが自閉スペクトラム症(自閉症傾向を含む)を併せ持つ。

#### 2) クラスの療育支援目標

未就学児が多く在籍しており、愛着形成、全面受容の視点は欠かせない。加えて、家族背景と生育歴を十分に考慮した上での心情洞察が必須である。

動・静のバランスの取れたプログラム展開に留意し、一場面一目的の活動にすることで、環境を構造化し、母集団や写真カードを手がかりに、毎日同じ流れでプログラムを進めることで、一人ひとりが見通しを持ち、穏やかに参加することをねらいとしている。

### 2. 日課プログラムの内容と狙い

#### 1) プログラムの内容

| 午 前   |                       | 午 後   |           |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 9:20  | 受け入れ、着替え              | 13:30 | 受け入れ、あつまり |
| 9:50  | あつまり、トイレ              | 13:45 | 室内日課      |
| 10:10 | 体育<br>(7/1-8/30 はプール) | 14:15 | 歩行        |
| 10:50 | トイレ、着替え               | 14:40 | 音感        |
| 11:10 | お茶                    | 15:00 | トイレ       |
| 11:15 | フリータイム                | 15:10 | 手洗い、おやつ   |
| 11:35 | あつまり、トイレ              | 15:40 | フリータイム    |
| 11:45 | 帰寮                    | 16:05 | あつまり、トイレ  |
|       |                       | 16:15 | 帰寮        |

#### (1) 受け入れ・着替え・あつまり

午前・午後ともに、利用者を教室で受け入れる。生活クラスから日課クラスへの切り替えの場面であるため、場面転換を意識出来るよう一人ひとりと目を合わせて挨拶をする。

受け入れた方から、順番に体操服へ着替える。着替えの動作を引き出しながら、自発的な動きの定着を目指す。

全員揃ったところで写真カードと口頭で、午前・午後それぞれ半日のプログラムを確認する。

## (2) 体育

体育職員を中心に、体育館で1クラス約30分、ランニング(2曲/約7分)、サーキット(マット運動/前転・雑巾がけ運動・高這い、肋木、平均台、巧技台昇降運動)、トランポリンを基本のプログラムとして行っている。個々の利用者の体力や能力に合わせ、無理なく、楽しく参加出来ることを第一としている。運動量を確保し、基礎体力と身体能力の向上と、体を動かすことで気持ちの発散を図る。なお、夏季(7/1~8/30)は、プールプログラムを展開。

## (3) 室内日課

教室にある様々な教材やおもちゃを提供し、それぞれの好むものや興味・関心があるものを探る。担任と一緒に教材に取り組み、人に対する意識や取り組みへの意欲、認知力の広がりにつなげる。

## (4) 歩行(屋外・園内)

屋外での歩行(園周歩行)は、1周約800メートルの園周を基本のコースとし、担任やクラスのメンバー2~3名で手を繋ぎ道路の路肩を歩く。園内での歩行(園内歩行)は、一列に手を繋ぎ、寮舎の各フロア(1~4階)を歩く。屋外・屋内ともに、利用者や担任と手を繋ぎながら歩くことで、手繋ぎへの意識や、グループのペースに合わせて歩く練習をしている。これによりグループへの意識や、協調性を育み、園周歩行の際には道の端を歩く、道を渡るときや車が来たときには一度止まるという動きを意識出来るように進める。

## (5) 音感

名前呼び、ジャンピング、歌絵本の3つのプログラムを基本としながら、週に1回程度リラックスタイムを取り入れる。音楽プログラムを通して楽しい体験を重ね、気持ちのリフレッシュを図る。また、音楽を媒介とした情緒的な関わりを通して人と関わる楽しさを味わい、共感性を育む。

## (6) フリータイム

主に午前・午後の帰寮前、生活クラスに帰る前に、遊ぶ時間としている。同時に、どのような教材やおもちゃを好むかなど、興味や関心がどこに向いているかを担任が把握する時間としている。

## (7) トイレ

概ね45分から1時間での定時促し。常時紙パンツの方、紙パンツと布パンツを併用している方、布パンツにしたばかりの方など、トイレでの排尿・排せつが定まっていないメンバーも多いため、個々の時間間隔、様子に合わせて個別にトイレにつけながら、排せつ・排尿の自立を目指して進める。また、トイレへの意識をつけるために、常時紙パンツのメンバーも、便座に座る動きを促す。

## (8) お手伝い(役割)

グループを離れ、担任と1対1で取り組む時間。個に注目し、担任と一緒に取り組むことで楽しさや達成感、自分に任された役割として、気持ちの充足を図る。

## 2) プログラムのねらい

- ・静的プログラム(注目・集中)と動的プログラム(発散)をバランスよく組み合わせ、1日のプログラムをメリハリのあるものにし、活動量を確保していくことで、生活リズムの整えにつなげる。
- ・体育や室内日課など、個々の体力や能力に合わせて、無理なく取り組める課題を提供する。その中で「出来た」体験を積み重ね、取り組みへの意欲や自信、自己肯定感につなげる。
- ・取り組みなどでお友達の順番を待つことで待機への意識や、歩行などでグループのペースに合わせて動く活動を通して、集団への意識、人への意識につなげる。
- ・プログラムは基本的に毎日(月曜から金曜まで祝日も含む5日間)同じ活動を繰り返し、構造化によって見通しを持ちやすくし、安心して参加・取り組める環境を提供する。
- ・担任との関わりを通して、人と関わる心地よさ、安心感を体感してもらい、一人ひとりが育つための土台を整える。

## Ⅲ. 支援経過

### 1. 2022年度:1年目 全面受容の姿勢で人や場所への安心感、信頼関係を作る

#### 【学園・日課クラスの体制】

コロナ禍で日中活動を行えない日も多く、稼働日数は136日、通常の日課クラスの稼働日数と比べると90日ほど少ない。現担任はこの年、Aさんが在籍する生活クラスのヘルプ職員として配置され、平日の昼食ヘルプやクラスター等によって日中のケアが必要な際に生活クラスに入ったことから、Aさんと入園初日から関わる機会があった。

日課クラスは担任1名、利用者はAさんを含む未就学児2名、学齢児5名でスタート。10月に未就学児1名が入園し、総数8名となる。Aさんが自由な行動をとっても、許容出来る状況や環境があった。

#### 【プログラムの状況】

##### 受け入れ

3階の生活クラスから1階の日課クラスに移動する間に見通しが持てなくなり、泣きながら入室することがほとんどで、時間経過とともに少しずつ落ち着いた。徐々に動きを理解し、年度末にかけて泣きながら来ることは減った。体操服への着替えは、全介助で行った。日によって、落ち着いて着席し足や腕を上げるといった協力動作が出る時もあり、拒否感が強く抵抗が見られる時もあった。

長期の休みなどで日中活動の間隔が空くと、促しに対して拒否が強くなったが、概ね1～2週間ほどで元のペースを取り戻した。

##### 体育

ランニングは1曲(約3分)。プログラムに沿う活動のため、やりたいことが出来ず座り込んだり泣いたりすることが多かった。職員が1名つき本人のペースに合わせて個別に進め、取り組みの有無よりも一緒に楽しく体を動かすことに重点を置いた。肋木の昇りやトランポリンなど、本人が好きな活動では自発的な動きが出たが、その分もっとやりたいという気持ちから終わりの受け止めが難しかった。また、壁際が待機場所のた

め、手すりなどに登りたい衝動が強く、止めたり着席を求めたりすることで反発が続き体育そのもののイメージが悪くなり、体育館に行く前から座り込み移動が難しくなった。そのため、担任の視野内で安全確保をしながら、手すりへの登りを許容した。プログラムの見通しが持てるようになると、徐々に泣きや座り込みは減少し、年度末にかけてムラはありつつも、本人のペースですべてのプログラムに参加出来た。

夏季のプールも職員が1名ついて進めた。足がつかない25メートルプールでも水への抵抗感や恐怖感は見られず、アームヘルパーと浮きを腹部に着けて浮遊を楽しみ、Aさんにとってはとても楽しめるプログラムだった。一方で、もっと遊びたい気持ちから、終わりが受け止めにくかった。最初に着替えを促し、他の利用者の着替えが終わるまでの時間を、更衣室の中で自由に動くことを許容することで切り替わった。

## 室内日課(フリータイム)

教材等の取り組みはせずに、ソファが置いてあるスペース(リラクセスエリア)で自由に過ごす時間とした。絶えずパタパタと動き回ったが、環境に慣れてまわりを見るが増えると、自分の好むものを目で追ったり探したり、絵本を手にとることが増えた。

終わりを受け止められないことが続いたので、終わりを意識する間を作らずにグループの帰寮の動きに合流してもらうことで、泣いたり座り込んだりすることは減った。

## 音感

昼食後に、1時間～1時間半ほど午睡を取り参加した。眠気が残るときもあったが、プログラム展開の中で目覚めることがほとんどだった。着席しての待機は難しく、教室内を自由に動き回りながら参加した。ジャンピングは好きなため自分の番には自ら台に近づき、ここから徐々に他のプログラムも意識し始め、名前呼びでは自分の名前に合わせて担任に視線を送り、歌絵本を触りに来る姿があった。3学期には、体力が付き午睡をなくしたが、眠気でぐずることはなかった。

## 屋外活動

屋外での活動は、ショートコース(約400メートル)の歩行やグラウンドの遊具遊びを行った。歩行は、担任と手を繋ぎ屋外の雰囲気を楽しみ、座り込むことはそれほどなかったが、プールが始まると暑さや疲れから途中で脱力するようになった。クラス全体でも状態の低下が見られたため、室内の過ごし(フリータイム)に変更する状況もあった。

グラウンドでは大型の遊具を好んで遊んだ。雨天後などでグラウンドのコンディションが悪く使えないときには、園周歩行を行ったが、園周歩行の日はグラウンド遊びが出来ないということを理解してからは、脱力が見られはじめ年度末まで続いた。

## 【2022年度の考察】

入園間もなくのAさんは、人への意識や関心が薄く、「我的世界」に生きている状況と言えた。人に対して意思表示は出るものの、自分が何かをしてほしいときにその手段を持つ存在、あるいは、その手段そのものといった印象を受けた。こうした姿は、ご家庭で似通った姿があったと、両親からも伺っている。そのため、Aさんのペースを出来る限り尊重し、毎日の過ごしを快刺激につなげ、まずは楽しく過ごし、関わる人とのイメージが良いものとなるように進めた。

同時に、生活クラスと情報共有をしながら、生理的三原則(食事・排せつ・睡眠)の整えを目指し、身体的な不快感を取り除き、安心感(快)の提供に努めた。日中の動的プログラム(体育や歩行)を中心に適度な運

動量を確保し、眠剤のロゼレムは服用せずに就床を促した。それほど断眠なく夜間の睡眠を確保出来ていたため、薬は使用しなかった。また、日中に無理なく活動が出来るよう、年齢的な体力面も考慮し、5月半ばから1月終わりまでは午睡を取り入れながら進めた。

さらに、「この場面では何をするのか」「誰と取り組むのか」「いつまでするのか」「終わった次はどうするのか」といったことを、毎日同じ担任、同じプログラムや場所の中で分かりやすく繰り返し、見通しを持たせた。見通しを持つことで、好きな取り組みには自発的な動きが出やすかったが、「今日終わっても明日も出来る」といった日をまたいで見通しを持つことには難しさがあり、「終わり」の受け止めは難しかった。また、自分がやりたいことを止められることや「出来ない」「やりたくない」といった思いから、泣きや座り込みになりやすく、パターンとなり同じ場面でマイナスのイメージが付きやすかった。ある程度受容したり、プログラム内容や動きを変えイメージを続かせないことで、その場面を良いイメージに塗り替え参加出来るようにした。コロナ禍であったため、日中活動の稼働日数が少なく、途切れてしまうことで、見通しは積み重なりにくかったが、それでも年度末にかけて笑顔で過ごせる時間が増えた。

## 2. 2023年度:2年目 環境設定の力をかりてプログラムに気持ちを向けて参加する

### 【学園・日課クラスの体制】

5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したため、生活クラスでは、週末の家族の面会等も人数制限、時間制限がなくなる。2023年度の日課クラスの稼働日数は182日。通常の日課クラスの稼働日数と比べると45日ほど少ないが、2022年度より46日多い。

担任1名(現担任)、利用者はAさんを含む未就学児2名、学齢児4名。9月、10月、3月に未就学児の新入園があり、年度末にかけて総数9名となる。10月休み明けより、サポート職員が常時クラスに入る体制となる。一日のプログラムは、2022年度と同じ流れで展開。

### 【プログラムの状況】

#### 受け入れ

年度の初めから、落下防止用の安全ベルト付きのハイチェア・ローチェア(以下、設定椅子)を取り入れてスタートした。昨年度に生活クラスの食事やおやつで着席が必須な場面に、目的意識を持てるように設定椅子を取り入れ、落ち着いて食事に向かい職員へ意識が向く様子が見られた。日課クラスでも、そうした姿を引き出すために導入を試みた。

年度初めの環境の変化から最初の2~3日は泣いて入室したが、その後は泣かずに過ごせた。しかし、今までとは異なる設定椅子に着席を求められることで泣くことが続いたため、設定椅子に座り楽しく過ごせるように、お気に入りの本を渡し気持ちの切り替えを図った。入室すると本を求めて担任の顔を見る姿があり、着席し、担任とあいさつ(目を合わせてハイタッチ)をしたら、本を渡す流れを繰り返したところ、1週間ほどで自ら着席し、設定椅子が「自分の椅子」という意識がついた。

5月休み明けに体調を崩して静養をしたが、この静養をきっかけに担任への意識が高まり、担任のマスクを取り自分の顔を近づけ見たり触ったりというスキンシップをしたかった。そのため、あいさつの後はAさんと関わる時間を意図的に入れた。

体操服への着替えが終わると、早く次のプログラムに行きたがったため、取り組みの順番を最後にし、Aさんが終わったら体育館へ行く流れで進めた(これは、どの場面でも共通)。着替えは全介助で行ったが、足や

手を上げる協力動作がほぼ毎回出てくるようになった。11月頃から着替え中に担任の膝上に乗りたい姿が増えた。これは、生活クラスで担任ではない職員がグループに入ることが増え、気持ちの疲れから、日課クラスの担任にも嘔みつきが増えた時期でもあった。気持ちに寄り添うことで嘔みつきは見られなくなったが、膝の上に乗る動きは残り、2月頃になると着替えへの目的意識がそれてしまう状態が続いた。

## 体育

ランニングは2曲約7分となり、待機エリアは壁から離れた位置に変え、担任が床に座りAさんが学習椅子に座ることで、視線が合い、ずいぶん椅子の上に居られるようになったため、待機エリアから出ないように進めた。立った状態での待機(順番待ち)は、ごく短い時間でも色々なものを気にして落ち着かないため、椅子に着席し待機した。

取り組みは、スタートから担任と手繋ぎで進め、昨年度同様にAさんのペースで取り組んだ。プールが終了し、体育館での体育が再開したタイミングで、グループの動きに合流した。順番は最後にし、無理なくAさんがグループの中に居られる程度から始めた。その後、徐々にグループの動きについてこれたところで、順番を利用者の間にし、一定ペースでの取り組みを始めた。待機も持続するようになり、待機エリアで順番を待てるようになった。3学期、ランニングでは担任と手を繋がなくとも一人で走れる姿が出てきたため、ペースは本人に任せて止まらずに一人で走ることを目標に進めた。担任以外の職員の声かけを、受け入れることを期待して体育職員にも声をかけてもらった。なお、2月末より花粉症状が出始めると、鼻づまりの苦しきから動きの出にくさが見られ、担任に手繋ぎを求めたため、気持ちを受けて一緒に活動した。

夏季のプールは、早く入りたい気持ちから一人でプールに入ろうとした。最初はそれを止められることに苛立ったが、水遊びをしながら待機し、また、自分のクラスの番になれば入れるという見通しが持てると、落ち着いて待機することが出来た。まだプールの底に足がつかないため、アームヘルパーを着用し、職員が1名ついて進めた。担任が体を支えることには反発があり、一人で浮き、水中で動き続け、非常に楽しんだ。反面、終わりの時間は受け止められず、泣いて担任への嘔みつきが続き、切り替わりにくかった。そのため、プールから上がったなら先行して更衣室に戻り着替えを済ませ、Aさんのお気に入りの本を渡して気持ちの切り替えを図り、終わりを受け止められるように進めた。嘔みつきについては、プールに入っていたかった気持ちには共感しつつも、行動そのものは止めながら進めた。2週間程続いたが、嘔みついても入れないという諦めと、着替えたら本を渡してもらえという見通しから、気持ちに折り合いをつけ、嘔みつきは見られなくなった。

また、プールは非常にモチベーションが高かったため、行きの移動ではお友達同士の手繋ぎで目的の場面(更衣室)に向かうことが出来た。

## 室内日課

8月までは、暑さやプール疲れなどを考慮し、昨年度同様に好きな過ごしりの時間とした。その一方で、Aさんの余裕がありそうなときに、視界に入る位置で担任が教材を行い、興味を示したときには一緒に取り組むということを繰り返し、好む教材を探った。プットイン教材を好む姿があり、11月の運動会後から毎日取り組みを始めた。時間を要すると途中で飽きて散漫になるため、短時間で終わる量からスタートし、徐々に個数を増やした。取り組み後にフリータイムという流れで進めたことで、積極的に取り組んだ。また、繰り返すことで、室内日課として取り組んだ教材をフリータイムにやろうとする姿があった。上手いかないと担任の手を引いて助けを求めることもあり、一緒に教材をやるが多々あった。しかし、担任が欲を出してフリータイムも集中した取り組みを求めると、本人のやりたい気持ちが削がれたため、室内日課では声掛けや動作付け、指差しなどで集中を求めたが、フリータイムは本人の気持ちややり方などを尊重した。

## 音感

教室での過ごしと同様に、音感でも設定椅子を使用して進めた。受け入れの姿と同様に、着席に対して反発が見られたが、入室し椅子に着席後、プログラムを開始するまで本人が好むイラストをラミネート加工したものを渡すことで、抵抗感を減らした。このように進め1週間ほどで自ら椅子に座る姿が定着した。着席により多動さが抑えられたことで、プログラムを展開する担任や、プログラムに気持ち向きやすく、名前呼びでタイムリーにハイタッチをし、歌絵本では毎回絵本に触ろうとし、よく見る姿が増えた。疲れから眠気が出やすい時間のため、あくびは多く、順番を待つ間は着席した状態で後ろを向き、窓の外を見て、ごく稀に寝てしまうこともあった。

## 歩行活動(園周歩行・園内歩行)

外での活動は好み、高揚した様子や笑顔が見られた。一方で、前年度の座り込みがパターン化しており、歩き始めは表情が良いものの、ショートコースと園周1周コースの分岐からグラウンドの遊具が見えるところで、脱力や座り込みが始まり、歩くことを促されてさらに反発となり、噛みつきが出るようになった。そして、ここで噛みつきが出たことで、反発の意思表示として日中活動の中で噛みつきが出やすくなった。この反発は、園内歩行に切り替えるまで続いた。

夏季は、プールによる疲れや熱中症対策から屋外での歩行は行わず、音楽をかけながらクラス全員が一列で手を繋ぎ歩く園内歩行を進めた。最初はプールや体育館の方へ向かうことで、勘違いし、座り込んでいたが、担任とサポート職員でAさんと手を繋ぎ励ましながら歩いた。1か月ほどで見通しを持ち、約3か月毎日繰り返すことで、スタートからゴールまで手を繋いで歩くことが定着した。

10月休み明け、屋外での歩行を再開した。ショートコース(約400メートル)をベースに、前期にパターンの座り込みになった場所の途中で折り返し、園内歩行と同様に、音楽をかけ一列に並んで歩いた。これらにより、屋外での歩行に良いイメージ、気持ちで参加出来、また、園周歩行の座り込みのイメージを払しょくすることが出来た。冬休みまでは、この形態で屋外での歩行を行い定着を図った。屋外での歩行に気持ちよく参加し、良いイメージで終われるように進めた。

冬休み明け、園周歩行を再開。車通りもあるため、1列ではなく担任との手繋ぎで進めた。落ち葉や木の棒を拾ったり捨てたりしながら、座り込むことはなくグループのペースに合わせてスムーズに歩けるようになった。

## フリータイム

カラフルな色がたくさん使用されている絵本を好んだ。感覚遊びから本を破り通常の絵本はすぐに破損となるため、絵本をカラーコピー、ラミネート加工し、二重リングで繋いだものを提供した。また、ラミネートの端を折ることや紙・ペンでの感覚遊びを好み、教材の棚に無い物を求める傾向があった。最初は手の届く範囲のものを勝手に取っていたが、担任がやんわり止めたりAさんの手が届かない場所に置き、代わりにAさんの好む本などを渡したりしたが、不機嫌な声を出してそれらを放り出し、再び自分が欲しい物がある場所まで担任の手を引く行動が続くようになった。そのため、Aさんが欲しいものを訴えるときは、「ください」というサイン(両手を叩く)を担任が示し、手添えでの模倣を繰り返し、Aさんからの発信を引き出す機会として進めた。次第に手が届く範囲でも、担任に「ください」というサインを出すようになった。

フリータイムは自由に遊べる時間であるため、状態が崩れることはほとんどないものの、終わりを受け止められず泣きや苛つきになることは多々あった。終わりを明確にし、泣いても怒っても、ときに噛みついたとして

も、「終わりは終わり」というラインを示した。これを繰り返すことで10月休み明け頃より、泣きながらも自分で設定椅子に座り、生活クラスに帰寮する準備(上履きを履く、リュックサックを背負うなど)をし始める姿が増えた。花粉症の不快感や疲労感がうかがえるときには、受け止めにくさがあったが、年度末にかけて、徐々に泣かずに終わりを受け止められることが増えた。

## トイレ

入園時は常時紙パンツを着用。生活クラスで排尿促しを始める際に、Aさんの性格や障害特性などから、確実に出る朝食後に導入し、「便座に座る＝排尿を出す」というイメージをつけたいという話があった。そのため、生活クラスである程度トイレで排尿を出すという意識がついた5月から、日課クラスでもトイレの排尿促しをスタートした。個室に入り、ズボンと紙パンツと靴下を全部脱いで便座の上にしゃがみ排尿しており、トイレにつければ排尿が出た。「本当にトイレでするようになったんだね！」と褒めると、便座からジャンプして降り、嬉しそうに笑う姿があった。このトイレでの排尿の成功は、両親もとても驚き喜んでくださり、11月と3月に父母実習で日課クラスを見学された際には、両親がAさんをトイレに促し、Aさんがトイレで排尿している姿を見て、本人とともに喜び褒めてくださった。また、実習を通してAさんのトイレの様子を知ったことで、帰省の際にも、ご家庭でトイレでの排尿を促してくださった。

その後も段階を踏む際に生活クラスが先行して導入し、概ね安定してから日課クラスで導入する形を取った。気候が落ち着き、Aさんに体力的な負荷が減ったと感じられる10月頃を見計らって、生活クラスで起床から日課クラスへ送り出すまでの間と、夕食前のトイレからパジャマへ着替えるまでの間で、布パンツへのトライを始め、安定した2月頃から日課クラスの時間帯でも布パンツにトライし始めた。しかし、一日の大半を布パンツで過ごすことは、Aさんにとって大きな負担感があったようで、失敗をして服や床を濡らすと、「こんなつもりじゃなかったのに…」といった自尊心の傷つきを思わせる泣きが見られた。「大丈夫だよ」「お着替えをしましょう」と声をかけ、衣類を交換すると、失敗したことは無かったことになるのか、間を置かずに泣き止んだ。羞恥心の現れであり、傷ついたプライドを修復しようと本人なりに立て直しを図っているのだろうと思われた。そのため、失敗しないように個別でトイレにつけたが、やりたいことを中断され、グループから外されることで、トイレのイメージが悪くなりトイレへの入室を拒否したりトイレの待機中で泣きになったりした。また、「排便は紙パンツ内でする」という認識のAさんにとって、布パンツを履く時間帯での排便は無く、溜まりがちな状況となった。

そのため、午前の生活クラスから日課クラスへの切り替わりの時間に紙パンツにし、体育館に行く前のトイレで布パンツにして、昼に生活クラスに帰寮する前のトイレで紙パンツにした。次第に、受け入れから体育館に行くまでの間に紙パンツに排便をするサイクルとなった。このサイクルが出来る頃には、Aさんがトイレに行きたそうな様子を担任が気付けるようになり、Aさんが尿意を感じたときにトイレに行くことを繰り返すことが出来た。この積み重ねにより、次第に自分がトイレに行きたいときには担任の手を引いて教室の外に出る動きが出始め、トイレに対する拒否感もなくなった。

段階的に、日課クラスの午後の時間帯も布パンツにトライしたが、2月終わり頃から花粉症状による不快感から状態が低下し、普段しない場面や時間の遺尿や漏便が増え、気持ちの疲れが顕著だったため、3月半ば生活クラスと相談のうえ、常時紙パンツ着用に戻した。これにより、少し気持ちを持ち直したが、布パンツへのトライがAさんにとって、非常に神経を使い気持ちの疲れにもつながることが分かった。

## 【2023年度の考察】

2年目、担任は変わったが、現担任は2022年度にAさんの生活クラスのヘルプ職員だったため、Aさんと

一緒に昼食を食べ、午睡の添い寝を行い、また、Aさんが好む過ごしに関わることが多く、良いイメージで日課担任として出会いスタートが出来た。5月頃に担任への意識が出てきたというのは、前年度にこうした関わりがあった職員が、今度は日課クラスの担任として関わることに気付いた、あるいはつながったとも考えられる。いずれにしても、こうした関係が築かれた状態からのスタートのため、設定椅子を用いた「目的を理解する」支援、「待つ」支援が出来た。

設定椅子に着席することで、周囲のお友達がどのような活動をしているのかが見え、Aさんの関心や意識がプログラムに向き、やってみたい気持ちから順番を待ち、順番が来ると自ら動き、意欲的に参加することが増えた。

一方で、体育やフリータイムの終了の場面など、担任がAさんの行動を抑制や修正しながら着席や終わりを求めることに対しては、受け止めるまでに時間を要した。「何をする場面か」が分かっている、「自分はこうしたい・もっとやりたい」という気持ちと折り合うことは難しかった。このような場面では、担任が毎日「一緒に待機する」「明確に終わりを伝える」というラインを崩さず進め、これと同時に、好きな活動やプログラムと一緒に取り組み、楽しさや達成感を感じ、信頼関係を作ることで、少しずつ受け止められたのだと考える。

課題行動(主に嘔みつき)は、最初、意に添わない状況や、動きを求められることに対して反発という形で表出したが、徐々に疲労感や緊張感が高まったときに、しんどさの表現としても表出した。特に人の変化からの疲労感は顕著であり、生活クラスの担任が新しい担任であったり、担任ではない職員であったりすると、日課クラスでも嘔みつきが見られた。そのため、課題行動が出た際には、その行動が許容出来るものではないと伝え、止めつつも、気持ちを汲み寄り添う声掛けを行い、スキンシップなどを通して切り替えを図ることが必要だった。

### 3. 2024年度:3年目 担任を軸に経験を重ね、意欲を育む

#### 【学園・日課クラスの体制】

概ねコロナ禍以前のペースで日中活動が行われる。

担任が2名になり内1名は昨年度から持ち上がり。利用者は未就学児5名、学齢児2名。5月に1名が退園し、5月、6月、12月、1月に未就学児の新入園があり、現在総数10名となる。

1日のプログラムは、午後の音感・歩行プログラムの順番が逆になった以外は、同じ流れで展開。

#### 【プログラムの状況】

##### 受け入れ・着替え

昨年度に引き続き、教室内の取り組み時は設定椅子を使用した。

新年度で生活クラスの担任が3名中2名変更したことなどが影響してか、4月と6月は日課クラスでの受け入れ後に、椅子には着席せずに持ち上がりの担任(以下、現担任)の膝の上に乗ればらく放心し、泣き、密着したがった。落ち着くまでスキンシップを図ることで気持ちを切り替えた。1か月ほどでこうした泣きはなくなったが、膝の上に乗る動きはその後も見られ、パターン的な様子もあった。9月や11月の行事が続く時期は、疲労感が抜けず、そのときにも膝の上に乗る、泣きや嘔みつきがあった。

体操服への着替えは、始めに声をかけて動きを促すと、自ら服を脱ぐ動きが出てきた。前後の判別などは難しいが、担任が服の前に出すと、自分で腕を袖に通し、ズボンに足を入れる動きがあり、少しの介助で自ら取り組むようになった。上手く脱ぎ着が出来ないと、担任の手を引いてやってもらいたい旨を訴えた。また、

プールの時期は期待感が大きく、自分でリュックサックから水着を出して着ようとする動きや、順番を待ちきれず、担任の手を引いて早く着替えをしようと促してくる姿もあった。そこで順番を待つように待機を求めても、機嫌が悪くはならず、終始にこにこ笑顔で待つことが出来た。

## 体育

6月末までは、ランニングで現担任の腕にしがみつながら走る姿が続いた。昨年度末は一人で自分のペースで走ることが出来たことや、新年度の環境変化による気持ちの揺れが見られたため、本人の気持ちを汲んで受けた。待機は担任が側につかなくても概ね学習椅子の上に入れられ、徐々に距離を取りながら進めた。なお、きちんと前を向いて座るのではなく、椅子の上でしゃがみ、後ろや横を向きながらの待機であったが、これは許容した。

マットの手の付き方や、肋木の握り方など細かい部分を求め、四つ這いから高這い、トランポリンの技に取り組みステップアップを行った。9月以降は鉄棒を掴み自分の体を支えるという、通常のプログラムにプラスした動きを取り入れ、体の使い方の幅を広げるための練習をした。以前からクラスのお友達がプラスαの取り組みとして行う姿を見ており、これをクラス全体のプログラムとして導入した。名前を呼ばれると、待機場所から自分で体育職員のもとに行き、鉄棒を掴む動きがスムーズに出た。鉄棒での体の使い方は日常生活の中ではほとんどない動きであり、本人も体の使い方のイメージが持ちにくかった様子があり、高這いなどは2～3日で出来るようになったのに対し、鉄棒は動きを覚える事に1か月以上の時間を要した。その間、体育職員のサポートを嫌がる様子はなく、あるとき急にAさんの中でどうすればよいかがつながり出来るようになった。体育職員と担任が「ついに出来るようになったね！」と盛大に喜び、本人は何が凄いのかというような表情をしたが、嬉しかったようで、現在も意欲的に取り組み、終わると両手を振りながら笑顔で戻ってくる。

また、約30分の体育プログラムに余裕をもち取り組む体力は十分つき、肋木では散漫さが見られやすいものの、概ねグループと同じペースで安定して参加出来るようになった。

夏季のプールは、期待感から非常に機嫌がよく、自発的・意欲的に動ける姿があったため、新担任との個々の取り組みは水着の着替えからスタートした。着替え後は、新担任・現担任の両方に「出来ました」とあいさつをしてもらい、「すごいね、今日も一緒に出来たね」「プールもやる気満々だね」と声をかけ、Aさんの新担任との良いイメージでの取り組みを積み重ねた。その後すぐにプールに向かう動きに入ることで、Aさんも意気揚々と次の動きに入った。昨年のプールでの活動を覚えており、先行してプールに入ろうとするのではなく、自分のクラスの番になるまでプールサイドで水遊びをしながら待機することが出来た。今年度は身長も伸び、足がプールの底につくようになり、時折足をつき、スロープにつかまって休憩をする姿が見られた。お友達が使っている浮き輪の存在に気づき、浮き輪で遊ぶ姿や、体育職員が抱き上げて水の中に本人をダイブさせる遊びも大好きでせがむ様子も見られた。前年度ネックとなっていた終わりの受け止めは、初日から体育職員の合図を理解し、スムーズに終わりの動き(シャワーを浴びてタオルで拭く)に入ることが出来たため、今年はグループと一緒に更衣室に戻り着替えを行った。

## 室内日課

前期は、日常生活を無理なく安定的に過ごせるよう教材には取り組まず、フリータイムとした。後期の10月休み明けから教材に取り組み、その後フリータイムを過ごすという流れで進めた。昨年度に取り組んだブックイン教材を、少し量を増やしてスタートした。慣れた教材のため、うまく入らないときも指先で器用につまみ向きを変え、概ね集中し昨年度より良いペースで取り組むことが出来た。見た目も量も多くこなせることから、達成感もあるようだった。11月にはステップアップとして、量は少ないが、すべて違う形の落とし教材に

トライした。しかし、マッチングしながらの落とし教材は少し角度がずれただけで入らず中々うまくいかないことから、散漫さから感覚遊びになり、苛つきから自分の頭を叩いて泣きそうになった。そのため、前期のフリータイムでAさんが手に取ることもあった突起付きの輪通し教材にトライした。本人なりに試行錯誤し、うまくいかないときは担任の手を引いてヒントを求め、担任の指差しをよく見て取り組むことが出来た。ピースを穴にさして回し続けることで、はまる感覚を覚え取り組む印象も受けたが、継続していく内にやりやすいように土台の向きを変えたり、同じ形や色を選んだりという姿が出てきた。こうした姿に、「すごいね！そんなやり方も出来るの?!」と驚いたり、「もう一回やってみて!」などと声をかけたりすると、教材を抱え込み、「もうやらないよ」というようなちょっと悪そうな笑みを浮かべてくれた。他に自分のやりたいことがあるとよそ見をしたり片手間に取り組んだりといった散漫さが見られるため、担任が側につきその日の様子から集中出来る量を提供して取り組んだ。Aさんは一人で取り組みたい気持ちが強く、手添えや指差しといった担任からのサポートを嫌がったため、本人がサポートを望んだときと目的意識が逸れそうになったときに声をかけて進めた。

## 音感

体育中は学習椅子で待機出来る姿があったことから、音感場面も学習椅子での着席にトライした。自ら椅子に向かう姿はあるものの、設定椅子と違い同じ椅子が並んでいるため、自分の椅子がどれなのか分かりにくく、毎回違う椅子に座り、位置を変えられることで離席になった。担任の隣席にして、一緒に席に向かうことで離席は減った。窓の外を見たい気持ちは強く、前向きには座れないが、本人の順番に担任が声をかけながら姿勢を正すと、前を向き、名前呼びではしっかりと目を合わせ、自分の名前に呼応してハイタッチを返し、歌絵本では色鮮やかなものを特に好み、担任がAさんの近くに本を持って行くと、引き寄せて指で触りたがった。ジャンピングは担任と手を繋いで飛んでいるが、自分の体重をかけたり、状態によっては抱きついて甘えたりと楽しんでいる様子だった。昨年度よりプログラム内容を理解し楽しむ様子が見られた。

5月半ばから新担任が展開した。音感プログラムを展開する職員と一緒に個別に取り組むプログラムも多く、常に音楽とともに展開することで、多くのお子さんにとって楽しめるプログラムであるため、関係が浅い新担任への意識付けや関係性を作っていくための導入と位置付けて進めた。歩行の後のプログラムだったため、あくびが多く見られたが寝ることはなかった。6月に気持ちにもやつきが見られた時期は、音感後のトイレで急に泣き出し、現担任へ噛みつきに向かう姿があった。これは受け入れて泣きや噛みつきが見られていた時期とも重なり、新担任への変更による負荷だと思われた。

10月頃から、隣に座る現担任の膝上に乗し、そのままの状態でも音感に参加することが増えた。担任の膝上に座ると、前を向いての着席になるため、お友達の取り組みに視線が向きやすく、よく見ている様子があった。また、膝の上で、音楽に合わせて上下や左右に揺れてリズムを取り楽しんだ。

## 園周・園内歩行

今年度から音感と歩行の時間が逆になったが、大きな揺れは見られなかった。前年度、園内・園周歩行を通して歩行の練習をしてきたことで、年度初めからしっかりと歩くことが出来た。歩行以外の移動は担任との手繋ぎだが、10月から担任の腕や服の一部を掴んで歩く動きが出てきた。これに合わせて、担任との手繋ぎから、利用者との手繋ぎを徐々に取り入れた。変更した直後は、納得がいけないといった様子のぐずつきや担任と手を繋ごうとする姿が見られたが、手を繋ぐ相手を固定して繰り返すことで、受け止める姿があった。「手を繋ぐ」という意識が持てるようになり、手が離れると相手の手を探したり、気持ちに余裕があるときには、両手に繋いだお友達をぐいぐいと引っ張り歩行への意欲を見せたりすることもあった。一方で、気持ち

や体力に余裕がないときには、手繋ぎの相手に噛みつこうとすることがあり、状態によっては担任との手繋ぎをすることもあった。

園周歩行は担任との手繋ぎで進めた。春先は葉っぱや枝を拾いながらスムーズに歩くことが出来たが、落ち葉が増える秋から冬にかけては、葉っぱを拾うことに気持ちが向き、歩くペースが滞りがちになった。歩行を促すことで再度歩き始め、以前のような座り込みや脱力・噛みつきなどが出ることはなかったが、落ち葉を気にしてしゃがみこむAさんに、声をかけ、抱きかかえて立ってもらい、背中を押して歩行を促すというように、動作付けを多く行わないと、まったく進まなくないことが続いた。

## フリータイム

担任に欲しいものを意思表示する力はずいぶん定着した。他クラスに、カレンダーやポスターなどの紙があると気づくと、担任の手を引いて教室を出て、欲しい物があるクラスまで連れて行くといった行動が出るようになった。最初は一緒に他クラスまで行き、担任を挟んでやり取りをしたが、最近では、「行っておいで」と背中を押すと自分で目的の教室に行き、貰ってくるようになった。一人で向かう先の職員は、普段から役割や園内歩行の際にもよく声をかけてくれて顔を見知っており、対応もAさんからの意思表示を待ち、Aさんがサインを出しやすいように促す声掛けをしてくれることから、本人も安心しているようだった。

## トイレ

11月半ばまでは常時紙パンツを使用したが、トイレでの排尿は安定的に出来ていた。布パンツへのトライは10月に生活クラスからスタートし、日課クラスでは11月の午前中の過ごしからスタートした。昨年度と比べると、ずいぶん排尿を貯められるようになり排尿間隔が長くなった。グループの定時促しで十分間に合い、個別のトイレ促しの必要は無くなった。

一方で、稀に疲労感が非常に目立つ状態のときには、トイレで排尿した後、布パンツを履きたがらず、担任に泣きながらパンツを渡したり投げたりし地団駄を踏んで怒った。紙パンツと布パンツの両方を出し、「どっちが良いの？」と本人に選択を求めると、紙パンツを選び自ら履いた。布パンツにすることで神経を使い、尿意に対しての緊張感、濡れることの不快感などがあるようで、紙パンツにすると気持ちが落ち着く様子があった。1月から、午前・午後とも生活・日課クラスの切り替えで一度紙パンツにしていた時間を、布パンツのまま日課クラスに送り出すというトライを始めた。現在までのところ、大きな気持ちの揺れや負担感は感じられない。

## 待機

教室以外で設定椅子を使用していた場面は、学習椅子やベンチでの待機に変更した。教室で待つ着替えやおやつ時間は、「今はフリータイムではない」ことを伝えるためにスタートは昨年同様に設定椅子を使用した。教室での過ごしも学習椅子を目指し、Aさんに気持ちや体力の余裕が見られ、担任の声掛けに対して受け止めが良いときには、設定椅子のベルトはせずに進めた。また、昨年度体育を通して「担任と一緒に座る」ことを求めたことで、Aさんの中でもこの意識が根付き、担任がAさんの椅子の隣に座るとAさんも着席した。現在では、待機しきれずパタパタと動き始めても、声をかけ着席を促すことで、自ら座り待てるようになっている。

また、高所登りがほとんど見られなくなった。行動を物理的に「やらない」環境設定にしたことで、この意識が薄れたことが大きな理由ではないかと考えている。

## 役割活動(担任と一緒に楽しく役割に取り組む／お手伝い)

年度初めより、午前のお茶と午後のおやつで使った食器を、担任と一緒に所定の位置に返却に行く役割を取り入れた。ごく短い時間ではあるが、担任と一緒に活動することで、気持ちを満たし、グループを離れた単独の動きへの受け止めの幅(柔軟性の広がり)を目指した。

Aさんの体格に対してカゴが大きく重く、持つことで精一杯な姿があったが、取り組みは積極的だった。一人でやりたい気持ちがあり、担任と一緒にカゴを持つことには抵抗感があったため、基本的には見守り、必要に応じて声を掛け手助けをしながら、本人のペースに任せた。床やベンチにカゴを置き持ちやすいように握り直したり、棚への持ち上げが難しいときは下の段に置いてみたり、担任にカゴを渡したり、担任に持たせた上で自分が棚の上に誘導してみたりと、本人なりに試行錯誤していた。

役割中に様々な職員とすれ違う中で、「すごいね」「頑張っているね」とたくさん声をかけてもらい、その都度、担任を見ながら飛び跳ねたり笑顔を向けて手をパタパタ振って喜んだりする姿が見られ、「よかったね」「嬉しいね」と共感しながら進めた。時には、こうした声掛けに対して、腕にしがみついて声をあげて笑うこともあった。

勢いよく走り、カゴの中の食器を床に落としてしまうと泣いて担任にしがみつき、食器を元に戻すと再び勢いよく駆け出すといった姿もあった。最近ではカゴをしっかり持ち、担任が真横で一緒に歩かなくても、教室を一人で飛び出し、途中で誰が自分に付き添っているのかを確認し、役割をこなしたことを見ていたか、確認するかのようになり担任を振り返り、得意げな表情を見せてくれている。「ちゃんと見ているよ」「一緒にいるよ」と声を掛けると、担任を待たずに先に走って教室に戻っていくが、担任が戻らないとどこにいるかを確認しに来ることも多々あった。

繰り返す内に「自分の仕事」という認識となり、役割を促す前に自ら上履きや靴下を履いて役割を行う準備をし、他のお友達にその役割をお願いすると泣いて怒ることもあった。何をするかを理解し、それに対しての期待感や意欲があるからこそだと感じた。

## 【2024年度の考察】

この年は担任が2名となったが、現担任との関係が出来ていたため、Aさんが新担任の存在に過敏に反応するといった様子は無かった。そのため、5月半ばより、新担任がプログラムを主導し、気持ちの負荷が一気にかからない様に、Aさんの様子を見て一緒に取り組む機会を段階的に作った。しかし、負荷はかかり、課題行動が表出したため、2023年度同様に行動の良し悪しを伝えながらも、本人のしんどい気持ちを受け止め、落ち着くまで寄り添った。また、今年度は、Aさんの気持ちを推測しやすく、励ましの声を早めに掛けることが出来た。これにより、新担任にも安心感を持ち、課題行動が出る前に気持ちを切り替え、しんどいと感じるときには両担任を頼れるようになり、年度の後半はずいぶん穏やかな姿が多くなった。一方で、担任のどちらかが休みなどの理由から、普段密に関わらない職員と活動すると、そのときは頑張れても、生活クラスに戻った後や、翌日日課クラスの担任と顔を合わせたときにぐずつく姿が見られた。人への柔軟性、関わりの幅は広がってきているが、それでもまだ配慮や気持ちのフォローは必要だった。

プログラム内容や流れはずいぶん理解し、Aさんから行動が出るが増えた。また、本人に合わせてステップアップを図り、出来たことを一緒に喜び、褒めることで、「やりたい」という意欲的な姿が多くなった。また、担任を気持ちの支えに、少し難しいことにも「自分でやってみたい」という思いが行動にも表れた。これらの積極的な姿が多くなることで、折り合えたり受け止めたりという姿も見られた。

## IV. 支援のポイント

### 1. 担任を安全基地とした、行動と気持ちの広がり

入園当初、人への意識が希薄であったAさんが、全面受容の姿勢によって丸ごと受け止められる経験を経て、2年目、担任と一緒に活動しポジティブな感情を共有することで、担任を意識し、「一緒にやりたい」という意欲的な姿につながった。そして、快の感情をたくさん感じ、経験することで、「一人でもやってみたい」と思う気持ちが生まれた。取り組んだ後には「出来たね」「やったね」と共有・確認することで、「出来た自分」という自信や自己肯定感を感じ始め適切な行動や積極的な行動が広がった。しんどい状態のときは、担任が気持ちを受け止めることで「この人と一緒にあれば大丈夫」という安心感や、安全基地としての関係性を育み一緒に乗り越えた。3年目は、担任との関わりの中で頑張ろうと思え、踏ん張れることが増えてきた。自ら担任を頼り、「一緒なら出来る」「一緒なら頑張れる」という安全基地としての担任の存在を軸にしながら、一歩踏み出し「やってみよう」「頑張ってみよう」という前向きな気持ちを支えた。担任と安心出来る関係を築き、その上で担任を安全基地とし、行動を広げ、時には基地に戻りながら様々なことに精一杯取り組んでいるAさんである。

### 2. 苦手な時期への配慮とペースに合わせたステップアップ

Aさんには1年の中で苦手な時期があり、新年度(職員や環境の変化)と2~6月・9~10月の花粉症状の出る時期は状態が低下した。また、夏の暑さも苦手で、体力の消耗から疲労が溜まり耐性が落ちやすかった。10月頃になると状態が落ち着くため、2024年はそれらを予測しながら進めた。

苦手な時期、負荷をかけない配慮は必要だが、一方で本人のやりたい気持ちや意欲を活かしながらステップアップすること(役割の導入、お友達同士での手繋ぎ、トランポリンの技のトライなど)は、成長が著しいこの年代にとってはかなりの伸びが期待出来ると考える。その兼ね合いは非常に難しく、課題行動が続いてしまう状況もあるが、嬉しさや喜びを担任と共有し、表情や行動から丁寧に気持ちを汲み取り、押し引きしながら進めることで、Aさんが自分の力にすることが出来た。そのたびに「すごいね」「よく頑張ったね」と褒めることで、担任の腕にしがみついて顔を隠しながらもはにかんだような笑顔を見せてくれた。苦手な時期は手放して喜ぶというよりは、照れ隠しのような表情が多かったように思う。

課題行動についても、誤学習にならないためには、表出しないに越したことは無いだろうが、Aさんの場合は、課題行動を自分のしんどさのサインとして表出することで助けを求め、担任を頼ってそのときの気持ちや場面を乗り越える姿が育った。Aさんの年齢を考えれば、必要であり、大きな成長の一步ではないかと感じる。

## V. Aさんへの支援をもとに、年少児の「出来た!」「やりたい!」を

### 引き出していくために必要と考えるもの

#### ① 構造化・見通しによって、安心・安全を感じられる生活環境を提供する

弘済学園に入園し、基礎1クラス(Aさんの日中活動のクラス)の在籍となる利用者は、未就学年齢で入

園してくることが多い。入園に至る背景も、障害の重さや特性も様々であるが、共通して言えることは、親元から離れて生活していることである。そのため、学園で生活しているだけで頑張っているし、自覚の有無とは関わりなく頑張らざるを得ない状況であるともいえる。だからこそ、生理的三原則による体のコンディションの整えや、担任との心地よい関係作りによる気持ちの安定、構造化により見通しを持ち安心出来る生活の場の提供、維持が重要になる。

また、色々な取り組みを担任と一緒に行う中で、「すごいね」と、自分の頑張りを認めてくれる職員、一緒に温かい時間を過ごし、嬉しい気持ちを共感・共有してくれる職員は、担任に限らない。役割や園内歩行など、教室を出て活動をする際に、知らない職員であっても、褒められたり励まされたり、時には一緒に歩いてもらえることで、嬉しそうな表情を見せたり、次の一步が力強いものになる姿がある。自分の受け持つクラスの利用者だけでなく、園全体で園の利用者を見守っていくこともまた、心地よい生活環境を提供していく一つの配慮であると考えている。

## ② 分かって動ける姿から、気持ちを育て、意欲や自信につなげていく

弘済学園における「構造化」とは、一日のプログラムにおける、「人」と「時間」と「場所」を毎日同じように繰り返し「見通し」につなげ、分かりやすい生活を提供していくことである。分かるからプログラムに安心して参加出来る、それを毎日繰り返すことで「出来る」が増える。「出来る」ことが「楽しい」「嬉しい」と感じられるように共感・共有することで気持ちが育ち、褒めたり励ましたりすることで、「やりたい」という意欲や自信につながるのである。また、見通しが持てるプログラムの中に、どちらが良いか選択する機会や、いつも異なる「楽しい」を提供して経験の幅を広げていくことで、「やりたい」という意欲をさらに育むことにつながる。

そして、日常生活を構造化により安定して過ごし、意欲や自信を育むことで気持ちの余裕につながることが出来れば、イレギュラーが起きた際にも、人を頼り、グループを手掛かりに、乗り越える力を身に付けることが出来ると考える。

## ③ 自己主張と、折り合い・受け止め

利用者の自己主張は、「いやだ」「もっと」といった気持ちがスタートになることが多い。好きなことや楽しいことを「終わりがたくない」、苦手なことや分からないことは「やりたくない」、こうした「終わり」や「やりたくない」ことを求める担任に対して反発したい、という気持ちが根底にあると感じる。しかし、こうした気持ちは、構造化により楽しい時間を保障し、今の楽しい時間が終わってもまた次があることを示し理解につなげることで、一緒に取り組むことで苦手なことや分からないことも「出来る」あるいは「出来るかもしれない」と感じられること、自分の主張が通らなかつたとしても、部分的に聞いてもらえる体験を繰り返すことで、次第に折り合い受け止められる。また、その姿を認められることで、気持ちを伝えることの必要性への気付きや、伝える手段を学ぼうと思う気持ちの芽生えにつながると感じる。否定や拒否の気持ちから始まった自己主張も、見通しや一緒に取り組む体験を通して成功経験を重ねることで、「またやりたい」「もっとやりたい」といった、前向きな自己主張に変化する。

## ④ あたためる時期から、一步踏み出す力へ

安心感、安全感を育てるための全面受容の支援を基本とする中で、どこまで心地よさを第一として進めていくべきか。利用者の多くは、担任と一緒に取り組む中で「自分でやりたい」という、気持ちを見せ始める。そのタイミングは個々で様々だが、次の一步に踏み出すための重要なポイントだと感じる。本人たち

の「やりたい」気持ちを、担任は見守りながら、どこまで出来るのか、手助けは必要なのか、本人はそれ（手助け）を求めているのか、ということを考察する。その中で、一人で取り組むことが難しいようであれば、手助けをしたり、励ましたりしながら、利用者のトライアンドエラーを支える。一步戻ってあたため直しながらステップアップをする方もいれば、泣いたり苛々したりしながら自分で試行錯誤してステップアップしたい方もいる。その一步の進み方も進む幅も、それぞれだが、それぞれのペースで着実に経験を積むことで、この先の大きな一步を踏み出す時の活力につなげていけると考える。

## ⑤ トイレの自立がもたらす気持ちの育ち

介護福祉において、排せつ・排尿の機能の低下は、社会活動への参加意欲や自立の意欲の低下を招きやすく、また、自分自身の存在価値の否定にもなることがあり、排せつ・排尿へのケアは生活全般の支援につながると言われる。トイレの自立は、人間が人間らしく生活するための基本と考えられるからである。

排せつが整うための体、心の準備は出来ているが、未自立の利用者に向けた取り組みも、これと似た意味を持つと考える。基礎1クラスでも現在半数が常時紙パンツを着用しているが、この1年で紙パンツから布パンツになった方や、現在布パンツにトライしている方もいる。個々のペースは様々で、非常にスムーズに自立が成功したケースもあれば、現在も紙パンツと布パンツを併用し進めているケースもある。共通して言えることは、こうしたトイレトレーニングをきっかけとして、成功したときには喜び、失敗したときには傷つくといった自尊心の育ちがはっきりし、排せつ・排尿と何も関係がないような場面で、一人でやってみたいという気持ちが芽生え、今まで出来なかったことや意識が向かなかつたことに急に気持ちを向けられるようになる傾向がある。生理現象は人間の本能的な部分でもある。こうした人間の本能的な面での自立感や達成感、他の何よりも「出来た」という実感が持ちやすく、自信や自己肯定感といった気持ちの育ちにつながり、より意欲を引き出す活力になると考える。子どもの自尊心(プライド)に配慮をし、トイレでの成功経験を重ねていくことは、生きる活力や意欲の育みにつながると言える。

## ⑥ 集団意識から生まれる社会性

クラスの利用者のタイプは様々で、担任には意識が向いてもお友達には向きにくい方、人への意識が高い方もおり、お友達に対して対抗心を燃やしたり、切磋琢磨しながら過ごす中で、年下のお友達や障害が重いお友達をリードしたり手助けをしてくれる方もいる。そうした姿を見て、自分も…と行動を真似してお友達に関わり始める方もいる。お友達に対しての意識がそれほど高くない方も、今グループが何をしているのか、どうやっているのか、ということをよく見ており、自分の動きのお手本にし、手掛かりにしている。これらの姿は、意外と担任が関わらない場面で見られたりする。十人十色の性格・障害を前に、担任は配慮という名目で良かれと思って先回りして場を整えがちだが、過ぎしのどこかではお友達同士の柔軟性に任せる時間を作ることは有効である。大人の予想を飛び越えていく利用者同士の反応もあるため、意外と侮れないものだと考える。

## ⑦ 支援した上での服薬

Aさんは当初、睡眠障害を抱えての入園であったが、日中の運動量の確保により夜間の睡眠が安定したため、現在も学園での過ごしの中では眠剤の服用はしていない。

このように、支援により行動や姿が落ち着く方もいれば、支援だけでは落ち着かない方もいる。やりたい気持ちや頑張りたい気持ちがあり、褒められることで心地よさを感じることが出来ても、障害特性による衝動性や強迫性などからマイナス行動となり、成功経験をうまく積めない利用者もいる。こうした個々

の行動に対して作用する薬は無いが、行動の要因となっている衝動性や強迫性に対して服薬の力を借りることで、マイナス行動を軽減し、それと同時に適切な行動や人との関わりを重ねることで、「やりたい」という意欲と「出来た」という成功経験を積み重ね、姿を変容させることが出来る。支援だけでは難しい部分に服薬の力を借りることは有効である。そのために、服薬が必要と思われる利用者をアセスメントし、Dr.につなげることは大切な視点である。

## VI. おわりに…

24時間、ご家族のもとを離れて生活する利用者にとって、週末の面会や長期帰省でご家族と過ごせる時間は何よりもかけがえのない時間であり、気持ちの満たしである。気持ちが満たされるから、頑張る活力・元気になる。その中で出来ることが増えれば、たくさん褒めてもらえる。それが「やりたい」という意欲や「出来た」自信にもなる。

入園される利用者のご家族の中には、お子さんと、どのように関われば良いのか分からず、疲れているご家族もいらっしゃる。そうした方には、まずはご家族に心と体をゆっくりと休めてもらい、元気を取り戻してもらう必要がある。気持ちや体力に余力が持て、お子さんに「会いたい」と思っただきったときに、学園での様子をお伝えする機会を大事にしたいと考えている。

同時に、面会や行事などに積極的に参加をしてくださるご家族にも、日常の姿をきちんと伝える必要がある。今回のセミナーにあたり、Aさんのお母様から、「ほかの子がきちんとやっている中で、自分の子どもだけが好き勝手にやっている姿を見ることが、申し訳なく、つらい時期もあった。色々頑張っているという話は聞くけれど、中々それを実感出来なくて、父母実習や父母の会(参観日のようなもの)などに来ることが少し憂鬱でもあった。だけど、今は色々出来ることも増えて、本人も褒めて貰って嬉しそうな姿で、だから学園での子どもの姿を見ることが、ようやく楽しみと思えるようになってきた。」というお話を伺った。

職員としても、全面受容を基本としていた期間は、「本当にこれでよいのだろうか」「もっと色々トライした方が良いのか」と思う瞬間があるのも事実だ。しかし、それは、大人の期待や都合であり、利用者ファーストの視点ではないこともある。つまり、こうした成果や反応が分かりにくい支援は、職員にとっては継続していく勇気が必要であり、子どもにとっては重要な時間なのである。そのことを、まず職員が理解した上で、自信を持ち、しっかりとご家族に伝えることで、ご家族が感じている申し訳なさや憂鬱感を減らし、今のお子さんを受け止めてもらうことが、お子さんにとって笑顔で関われる楽しい時間、気持ちの満たしになる時間につながるのではないかと考える。

Aさんのご家族は、入園以来、毎週Aさんに会いに来園され、帰省期間もご家庭で過ごして下さっている。その存在、時間は、Aさんにとって大きな気持ちの満たしであり、支えである。そしてそれは、これからもAさんの成長を支える原動力となる。大事なお子さんを託して下さるご家族が、心穏やかにAさんに関わるために必要なことをお伝えしていくこともまた、Aさんへの支援を支える必要不可欠なことであり、今後もご家族とともに進んでいきたい。

### 【参考文献】

・飯田雅子『知的障害・自閉スペクトラム症 寄り添い支援のまなざしー障がい者福祉のプロから学ぶ実践力ー』、Gakken、2022年。

- ・樋口隆弘編著『心理と保育の専門家が伝える保育がもっとうまくいく方法－子どもの発達・保護者支援・セルフケア・外部連携－』、誠信書房、2024年。
- ・帆足暁子『保育力 UP！0.1.2歳児 愛着を育む保育－40の事例を通して考える－』、Gakken、2019年。
- ・米澤好史『愛着障害・愛着の問題を抱えるこどもをどう理解し、どう支援するか？－アセスメントと具体的支援のポイント51－』、福村出版、2019年。
- ・公益財団法人 鉄道弘済会 総合福祉センター 弘済学園『こうさい療育・支援セミナー 第32回抄録集』、2022年。